鎧橋随想

（順不同）

隅田川の情景

ドットコモディティ　副社長　車田　直昭

「春のうららの隅田川♪」と唄われた隅田川。

96～99年の通産省（現経済産業省）商務室長時代、当時堀留町の建物が改築中のため箱崎の隅田川に面したビルにあった東工取をよく訪れました。水のある風景は人を惹きつけます。ときに、川岸に下りて、歳月を経ても変わらぬ姿を示す水面を見ながらしばし物思いにふけりました。

当時、行政の立場で商品業界、商品先物市場の変革に取り組んでいましたが、その努力が実際にどれだけの成果につながるか不安になるときがありました。オンライン取引の普及や石油の上場によって商品業界は変わるのだろうか。特に、霞ヶ関の常識からは不可能とされていた委託者税制の分離課税への改正に取り組んでいたときは、地を這うような努力が実を結ぶのだろうかと思うことが何回かありました。

目線を上げ、対岸の光景に目を移すと、そこにある建物群が20年、30年といった年月によって変わっていることに気づきました。小さな変化の積み重ねがいつしか大きな変化につながるのだ。「頑張ろう！」川岸を立ち去るときは、いつもそんな前向きな気持ちになりました。

ゴルフ

新日本商品　副社長　平川　政人

ゴルフに興味をもち始めたのは、30歳を過ぎて間もないころだっただろうか。仲間は既にコースに行き、結果はどうであれ、月曜日のお昼の休憩時間はコーヒーを飲みながらゴルフの話題で持ちきりだった。近くの練習場に仲間と数回通って、自信のないままコースでクラブを振ってみたが、当然ボールが真っ直ぐ飛んでくれるはずがない。空振りの連続だった。

たまに当たると大きく曲がって隣りのコースへ。

初めてのラウンドでボールが30個以上、林や池の中に消えていったのは今でもはっきりと記憶に残っている。あれから25年、まぐれでハーフ40をきったことは数回あるが、終わってみれば90前後、でも諦めないで今でもシングル目指して頑張っています。

50歳を過ぎたころから、仲間4人でゴルフ積立を始めた。「微笑む会」と命名し、毎月1回、半年に1回は泊まりで、プレーを楽しんでいる。

春の桜、秋の紅葉の時期は楽しさが倍増する。天気の良い日に遠くの山々を眺めながらのプレーもまた格別である。これからも仲間が健康で、趣味でゴルフを続けて行けたら最高の人生ではないだろうか。

理不尽な運命

三菱商事フューチャーズ証券　取締役　村上　公成

『国家の品格』という新書本が170万部を超えるベストセラーになり、国会の代表質問でも引用される程の注目度である。ここ10年来、米国が推し進めてきたグローバリズムに乗らされてきた日本人だが、ここへ来てゆり戻しの観がある。

海外経験も豊かな数学者が母国語の教育の重要性と一種のナショナリズムとも解される日本的なものの優位性を主張するのだが、新鮮であり共感を覚える人も多いのだろう。

ナショナリズムの高揚といえばスポーツ。今年も年初からトリノオリンピック、WBCが行われ、がっかりしたり感動したり熱狂したり、と忙しい。そしてサッカー、ワールドカップへと続く。サッカーは、ほんの数センチ差のシュートに、悔しがり、狂喜する。11人の技術と戦術の集約のほかに、理不尽ともいえる「運」が左右する世界だ。

地道な練習と緻密な戦略・戦術の挙句に、結果は「運」に左右される。世界のあらゆる人種、宗教の人たちが共通してこの「理不尽な運命」に魅せられ、愛する。

所詮、人生とは理不尽で、不平等で、努力だけではどうにもならない、だからこそ信じ、祈る、のが人間である証なのだろうか。

赤鬼

今村証券　取締役　松本　幹生

地元に「赤鬼」という名のやきとり屋がある。店を構えてかれこれ10年程になる。まったくの素人が始めたのだが、当初は本当に焼き鳥オンリーの店だったが、客の顔ぶれは多彩で、居座ること数時間にも及ぶ。

しかし、時の経過とともに常連たちは「今日は刺身は何がある？」と、焼き鳥には目もくれず、言いたい放題と化してしまい、そしてついには赤ちょうちんから焼き鳥の文字が消されてしまったのである。

翻って「金融商品取引法」。愛着ある名称の証券取引法が大幅に改正される。確かに証券業界も大きく変貌を遂げてきた。証券、銀行、保険と、高かった垣根はほぼ消え失せ、改正法の範疇になりつつある。「貯蓄」から「投資」への潮流の変化が確実なものとなったからには、顧客のニーズに素早く対応しなければならない。「お客様本位」。この言葉の意味は、なかなか奥が深い。

弊社が商品先物取引を取り扱うようになって早7年。昨年からは金地金の販売も開始したが、すこぶる好調である。これからも取扱い商品の多様化に合わせて、先頭を走り続けたいものだ。

そば

トリフォ　総務人事部長　真玉　秀樹

今・めんブームなのだそうだ。若い人には「ラーメン」、中・高年には「そば」。中年の私も好んでそばを食す。もともとめん類が好きなこともあるが、家内と休日に車で通る道すがら、神田・須田町の仕舞屋風のそば屋がいつも気になっていた。

そこで一度食べてみようということになり、のれんを潜ることにした。店内は外人・家族連れ・カップル・ひとりでといろいろ。しかし、客の3分の2は酒を飲んでいる。盛りそばを注文、口にしてみると「うまい」。日を改めて夜も行ってみた。酒の肴がまた良い。そばみそに始まり、にしん棒、ゆば刺し、焼き鳥等々。

長居はせず、最後にそばで締める。聞く所によるとこれが「江戸の粋」なのだそうだ。ある時、池波正太郎の本を読んでいると、なんとその店が出ているではないか。我が人生の目標とする氏の行き付けの店だったとは。おかげでのれんを潜る回数も増え、店の人にも名前を覚えてもらった。

昨今、巷のカルチャースクールのそば打ち教室は中・高年男性諸氏で満杯と聞く。わかるような気がする。高血圧、ダイエットに良いそうである。悩める中・高年諸氏は是非……。

襲名……

日本アクロス　管理部長　秋本　芳明

暇を見つけて、よく歌舞伎に行くのだが、ここ数年は襲名興行が続いている。華やかで楽しいのだが、なかなかチケットが手に入らないのが困りものである。さて、そしていよいよ大看板の登場である。坂田藤十郎である。

なにしろ歴史の教科書に出てきた記憶のある名前である。たしか東の市川団十郎に、西の坂田藤十郎。荒事の団十郎に対し、和事の藤十郎などという書き方だった様な気がするが、いずれにしても楽しみなことであった。襲名したのが中村雁治郎である。元気とはいえ70歳を過ぎた体で大丈夫なのか、少し心配である。しかし、先日、彼の舞台を見る機会があった。曽根崎心中という、得意の世話物だが、いやはや若い、華がある、男の色気が感じられる舞台で、びっくりした。うん、これなら、と納得がいった。

以前よりも華やいでいる様な気がするのは、襲名という先入観のせいだろうか。それとも大きな目標を持った人間が持つ高揚感が成せる技なのか、いずれにせよ、ずっと若い私が何だか気恥ずかしくなる様な日であった。負けてはおられないぞ。心の中で小さなガッツポーズを作ってみたが、何だか似合わないなあ。

拝見スケッチブック

駐英時代の思い出

日本商品委託者保護基金　副理事長　宮本　晶二

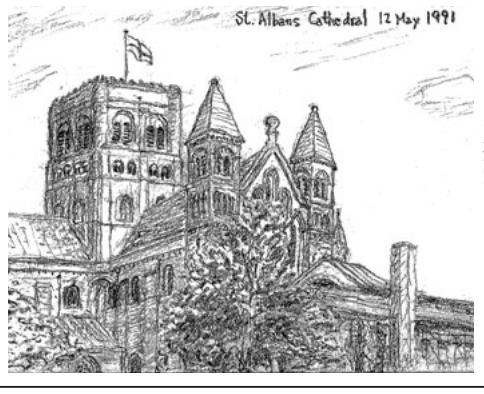
宮本さんの画業はイギリス駐在中の1年間に集中している。昭和63年から3年間駐英大使館参事官として赴任するが、初めの2年間は家族同伴だったため、週末は家庭サービスにつとめた。最後の1年間は子供の学校の関係で家族がひと足先に帰国し、単身赴任となる。42歳頃のことだ。この時、宮本さんの絵心がにわかによみがえる。

学生時代に油絵をやっていたというだけにもともと画才には恵まれていたが、一人暮らしのつれづれにスケッチの旅がはじまった。宮本さんは観光客で賑わうような名所旧跡は好まない。車でロンドン郊外に出掛け、城砦や寺院、石像、橋、樹木などを好んで描く。20～30分で1枚仕上げる早業で、1日に4、5点量産する日もあった。

イギリス人は週末の田舎暮らしを好むそうだが、イギリスの田園地帯には都塵にまみれた人々の心を癒してくれるなにかがあるのだろう。

宮本さんのスケッチブックはすべてモノクロで色は使わない。帰国に際し、50点ほどを収録した画集を少部数つくり、親しい人に配った。いまは在庫僅少という。

ハイドパークの騎士像



オルバンス大聖堂

年賀状に毎年1点ずつ印刷して往時のよすがとしている。

帰国後、宮本さんのスケッチブックは空白のままである。日本には絵心を誘われる題材がないからではない。週末に写生旅行に出掛ける境地に立ち至らないからである。宮本さんの画業が再開されるのは、どうやらリタイア後になりそうだ。とすると、まだ十余年先のことになる。宮本さんの新作を待ち望んでいる方々はもうしばらく辛抱あれ。

中部商取

韓国取引員含めてセミナー

石油・鉄スクラップ

中部商品取引所は4月6日、韓国からの取引玉の導入増を図るため、同取引所の準会員である韓国のFCM（商品取引員、準会員総数9社）6社の会長、社長と、韓国先物協会を含む約20名を招き、同取引所商取ホールで石油と鉄スクラップのセミナーを開催した。国内初の試みで、受託会員から約20名も出席、取引所、報道関係を含め約50人が参加した。

韓国の商品取引員は全体で12社、その半数が今回のセミナーに参加した。夜は同取引所受託会員と韓国準会員のトップが直接話し合う懇談会を大津市のホテルで開いた。

事務局だより

今年も多くの新人が商品先物業界に入られました。

スーツ姿も初々しい、という表現がもはや死語となってしまうのではないかと思えるほど、近頃の新入社員は着こなしが決まっているようです。

振り返ってみると、着慣れないスーツでギクシャクと動き、しどろもどろの挨拶をしていた自分自身の新人の頃が思い出され、隔世の感があります。

初心忘るべからず、ということわざがありますが、街を歩くフレッシュマンをみて、失敗を恐れず何事にも果敢に挑戦しようとする、あの頃の気持ちをあらためて思い起こした次第です。